

LA NOUVELLE

N°25

AUTOMNE

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者 藤倉洋一 (1970/昭45)
2020.10.1 発行

新型コロナウイルス下の東京外国語大学で 思うこと

大学院総合国際学研究院 / 准教授 秋廣尚恵 (1993/平5)

4月から新型コロナウイルスの感染防止のため、大学はオンライン授業となりました。技術的問題が生じるなど、問題点も多々ありましたが、対面式にはないメリットがあったと思います。出席率が極めて高かったこと、そしてチャットを通して普段より多くの質問が気軽にできるようになったこと、授業の記録をビデオで行い、オンデマンド型の教材を作成し、様々な練習問題をオンラインに掲載するなど、学生がいつでも復習し、利用できるコンテンツを作成することができたことです。いろいろなツールを利用して、学習を可視化できるよう、評価法も工夫することができました。



社会人の友人から、自宅待機の時期に海外の大学の面白い講義を聞き始めたという話を聞き、いくつかリンクを教えてください、のぞいてみました。大学に正規に登録するより安価に、興味のあるものをアラカルトで受講できる点は魅力です。(強力なライバルの出現に、危機感すら抱きます。)オンデマンドやオンラインのEラーニングが大学教育にとって重要度を増すことは明らかです。良質なコンテンツの開発など何か将来的に貢献できることがあれば取り組みたいと思います。

学生たちが最も大きな影響を被ったのは、留学でした。本学はフランス語圏の13の大学と国際交流協定を結んでおり、派遣留学、休学留学を合わせると30名以上の学生が毎年留学しています。水際対策で、多くの留学生が途中帰国を余儀なくさ

れ、また秋からの出発を断念しました。こうした学生のためにオンラインでの海外の学生とのタンドム学習などを課外活動として企画したいと思い、協定校のグルノーブル・アルプ大学の日本語科の先生とともに準備をしています。教員の講義を聞き、そのフランス語をモデルとするだけでなく、同じ学生同士のタンドム活動を通して、生きたフランス語を学び、異文化交流を体験する機会になるとよいと思います。

こうした困難な状況に関わらず、本学の学生のモチベーションや勤勉さは大したもの。学生から私も実に多くの刺激を日々受けています。また、卒業生から連絡をもらったり、ふらっと研究室に立ち寄ってくれたり、人づてでニュースを聞いたりして、その近況を知ることは大変うれしいことです。

私が本学を卒業してから、今年で27年が経ちます。パリと南仏に通算15年ほどおりました。学位取得、仕事、結婚、出産、育児と、様々な人生の節目を経験しました。夫がドイツ人ということもあり、フランスという枠を超えて、ヨーロッパという地域の中で生活できたように思います。次男の出産後まもなく、夫が大病を患ったため、働きながら、育児、介護をすることになりました。フランスならではの手厚い支援を受用できたことは本当に幸運でした。育児と介護のダブルケアの重圧で、さすがに仕事をやめなければならぬかと考えていると、「あなたがここで仕事をやめてどうするんですか。あなたが働き続けられるようにバックアップするのはこっちの仕事です。まかせなさい」としかり飛ばし、必要な手はずをスピーディに整えてくれたケアマネージャーのたのもしさを今でも思い出します。おかげで、研究面では数年間ペースダウンしたものの、大学での勤務を続けることができ、その後のキャリアアップにつながりました。今の自分があるのも、決して自分の努力だけではなく、必要なときに手をさしのべ、精神的にも物理的にも支えてくれ

た多くの人々や社会的支援が存在したからだ感謝しています。

現代の様々な問題を抱えつつも、モザイクのように多様な伝統文化が共存し、さらにアフリカ、アジアの移民文化との接触がもたらす、豊かな複合文化圏を構成するヨーロッパは、今なお興味深い地域です。そこでの経験がなかったら、今の自分はなかっただろうと思います。以前は、自分勝手な正義を主張して周囲を困らせ、しかもそのことについて全く鈍感で気がつかない人間でしたが、異国で考え方や習慣の異なる人々と接する中で、自分自身の考えを相対化し、異なる意見をすり合わせ、様々な角度から一つ一つの物事を吟味して行動する習慣を学んだように思います。ヨーロッパで出会った友人の一人が日本に遊びに来たとき、次のように語ってくれました。「アイデンティティというのはそう簡単に見つかるものではないよ、探し続けて、一生かけて徐々に作り上げていくものなんだから」と。複文化主義の中で生きる上で出てきた知恵でしょう。まだまだ人生半ばで未完成で、わが身の至らなさひたすら恐縮する毎日ですが、歩みを止めることなく、様々なものを取り込んで、自分自身を作っていければと思っています。



仏友会会計報告 (内部監査済み)

(2019年4月1日～2020年3月31日、単位:円)

収入		支出	
前年度繰越金	875,991		
総会費	290,000	総会費用	337,019
受取通信費	193,000	「LA NOUVELLE」発行費用	104,130
サロン仏友会費	195,000	サロン仏友会費用	192,356
		大学語劇お祝い金	30,000
寄付金	1,000		
		ゆうちょ銀行振替手数料	11,327
通常貯金利息	5	雑費	304
合計	1,554,996	合計	675,136
次年度繰越金	879,860		



仏友会とコロナ…奮闘記

仏友会会長 藤倉洋一 (1970/昭45)

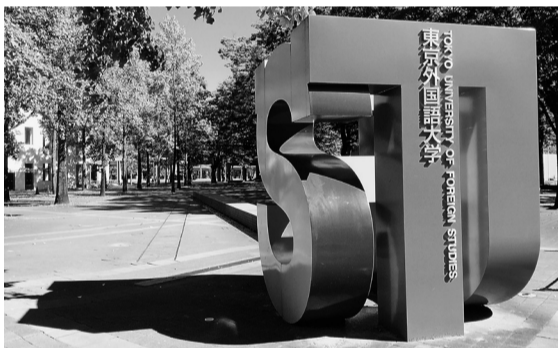
令和2年はとんでもない年になってしまった。新型コロナウイルスやCovid-19という言葉がすでに何度聞いたことか。そして聞くたびに緊張や恐怖が身体を通り抜ける。

私の場合、実感として新型コロナを強く意識したのは、仏友会の会報誌「LA NOUVELLE No24」の会員の皆さんへの発送作業を行う3月下旬であった。東京都では、3月25日小池都知事から不要不急の外出自粛要請がなされたところである。幹事と会員有志都合7名が本郷の外語サテライトの2階外語会会議室で3時間ほどかけて発送作業を行うことはすでに2か月前から決まっていた。ところが、家族から強烈なクレームがきたのである。新型コロナで厄介なのは、目に見えないし、誰もが加害者と被害者になりうるという点である。家族への影響も無視できない。7人では「三密」になると言われると抗えない。4人くらいに絞ってと思ったが、全員やる気満々である。

考え抜いた末、予定は中止にした。そして、3月30日、会員の住所・連絡先を管理している幹事の勝亦さんだけに来てもらい、二人で2時間ほどかけ最小限の下準備をして、会報、封筒、名前・住所シール、通信費振込用紙などの束をすべて私が自宅に持ち帰った。翌日(月末)、シール貼りと封筒詰めをし、近くの郵便局に持ち込んだ。有難かったのは、いつも行う「郵便料別納」のスタンプ押しをせずに済んだことである。郵便局の担当者が自身で切手を貼ると申し出てくれたのである。いつもなら、発送作業が終わると、皆で夕食を取りながら歓談するのだが、その機会を新型コロナに奪われたのが口惜しい。

会報誌第24号を発行すると、すぐ6か月後の企画を考えなければならぬ。今年は、新型コロナのせいで4月26日の仏友会総会を11月22日に延期した。会場のサンケイプラザも何とか違約金を支払わずに済むよう手配できた。問題は秋だが、とりあえずは、会報誌作成に集中できる。しかし、企画を立案する肝心の幹事会が開けない。4月半ばには、緊急事態宣言が全国に拡大された。どうする?遠隔会議しか考えられない。ZOOMを研究してみようと思い立ち、試みるも失敗。藁にも縋る思いで同期の岩本憲和兄に連絡を取り、教えを乞うた。緊急事態宣言が5月末まで延長されると発表された日である。持つべきものは良き友である。Team Viewerという遠隔操作も使えるのだから大したもの。こうして何とかZOOMのアプリケーションを設定できた。この時、世界の新型コロナ感染者は400万人を、死者は28万人を超えていた。

慣れれば至極簡単なZOOMであるが、初心者特にシニア世代には難物である。幹事18人にメールを送り、当方がホストになるので、事前に練習が必要な幹事は申し出て欲しいと連絡した。新宿でホストクラブがやり玉に挙がっていたころだ。多分半数くらいは練習したと思う。1日目はうまくいかず、携帯を



オンライン授業で学生がいなくなったキャンパス

かけっぱなしにして2日目に使えるようになった幹事もいた。こうして、ようやく5月25日夕方、第1回目の仏友会幹事会ZOOM会議が行われた。出席者は11人で、緊急事態宣言が解除された日であった。途中で接続が切れたり、一部音声が届かないトラブルもあり冷や冷やしたが、2時間近い会議は、会報の執筆候補もほぼ決まり、なんとか終わった。

第2回のZOOM会議は8月24日に開催したが、嬉しくないニュースが入ってきていた。大学の第99回外語祭が「オンライン外語祭」となったこと、さらに、フランス語劇は、オンライン配信になることで、著作権の問題が複雑になったり、対面での活動が容易ではないため準備が進まなかったりする等の理由で、参加を辞退するという衝撃の知らせが、8月22日語劇学生代表の篠原董さんからメールされてきた。毎年、仏友会からも大勢のOBが鑑賞し、お祝い金を渡すなど支援をしているが、学生さんとの交流を楽しむ数少ない機会だけに失望はとて

も大きい。また、大学から、新型コロナ感染拡大の影響を受けている学生さんへの寄付の呼びかけがあり、6月7日に、会員への皆さんにも協力を依頼するメールを送ったが、ずっとオンライン授業になり登校できないなど「自由」が奪われている学生さんが気の毒でならない。

毎朝、France2の前夜8時のニュースを見ているが、フランスでのコロナ被害は日本の比ではない。私は、F2のAnne-Sophie Lapixという女性キャスターのファンなのだが、7月9日に登場した後1か月たっても出演がなかった。1か月くらいのパケーションを取るの当たり前だから、その間3人の男性キャスターが入れ替わり報道するのを眺めていたのだが、8月中旬を過ぎて一向に現れず、いくら何でも長すぎる、もしかしてコロナに罹患してしまったのではととても心配になった。だから、8月24日元気な姿で再登場した時は、本当に嬉しかった。

8月も終わろうというある日、武蔵小金井の俳句の先生宅に伺った帰り、炎天下、大学のキャンパスまで行ってみた。週末なので人影もなく静かであったが、ウィークデーでも同じようなものだろう。学生の皆さんが大勢行き来しているキャンパスに早く戻って欲しいと祈った。



第25回仏友会総会のお知らせ

4月より11月に延期して開催する予定にしておりました掲題会ですが、今現在、未曾有の新型コロナウイルスの感染は終息せず、この11月の開催につきましても最終的決定を下しかねる状況です。皆さまには、ご心配・ご不便をおかけしますが、下記の通り、開催要領だけとりあえずご報告し、改めてメールや外語会報などで10月下旬までに開催の有無につきご連絡いたしますので、よろしくご了承のほどお願い申し上げます。

*** * * * * *
日 時: 2020年11月22日(日) 午後2時～5時
午後2時～ 総会、2時30分～ 講演
3時40分～ 写真撮影&懇親会
会 場: 大手町サンケイプラザ 201・
202号室(東京メトロ大手町 E1出口)
講 師: Monsieur Jérôme LE BOIS 本学准教授
演 題: 「日仏文化の差異を考える」(ご講演は日本語)



ルボワ先生はパリ出身。INALCO(国立東洋言語文化研究所)で博士号を取得されました。専門は日本史。2005年来日後、日仏学院で教鞭をとられましたが、2011年からは本学の非常勤講師を勤められ、2015年より准教授として活躍されています。

今回のご講演にあたっては、日仏文化の具体的な事例を取り上げ比較した上で、なぜそうなのかを掘り下げて皆さんとご一緒に深く考える機会にしたいと考えておられます。ルボワ先生には、日本人の奥様と4人のお子様がおられますが、「家族」のあり方を皆さんご自身の経験と照らし合わせて、再考するいい機会になるかもしれません。久々に現役フランス人先生の示唆に富む世界に浸ってみたいかがでしようか。

参加費: 5,000円
申込〆切: 11月15日(日)
メルアド保有の登録会員にはe-mailで、それ以外の登録会員には往復はがきで、10月下旬までにご案内の予定です。
申込先: 勝亦杏子: anzuko@k08.itscom.net



◀パリ便り▶

パリでのコロナとの闘い

守川智子（1988/ 昭 63）

パリ在住者としてパリの様子を伝える投稿をという大変光栄なご依頼を頂き、世の中コロナの話ばかりで皆がうんざり憂鬱になっている中、更にコロナの話をするのはどうかと思いましたが、現在のパリもコロナ抜きでは語れないことから、パリでのコロナ関連の体験を投稿することにしました（写真は勤務先がある Bd de la Madeleine）。



私は 1997 年よりパリにある日本の総合商社の管理部門に勤務しています。フランスでは 3 月 17 日から 5 月 11 日までの約 2 か月全面的なロックダウンが行われましたが、フランスで最も議論になったのはマスク着用だと思えます。当初は衛生当局や保健大臣でさえ、マスク着用は効果がなく不要というメッセージだったのですが、これはどうもフランス国内でマスクの備蓄が不足しておりマスク着用を求めると肝心のマスクがないという問題を表面化させないためだったと考えられています。その後、当局は 180 度方針を変更してマスク着用を奨励し、現在では一部義務化するに至っています。マスクの備蓄が不足したまま 180 度方針転換された直後は、マスクの入手に困難を極め、勤務先の従業員の出社の際のマスクを確保しようと担当者

外大でアフリカ研究を仕事にする

武内進一（1986/ 昭 61）

2017 年 4 月、外大に現代アフリカ地域研究センターが設立され、思いがけずセンター長の職に就くことになった。私は 40 年前にフランス科に入学し、卒業してからはアフリカ研究を生業としてきた。発展途上国に関心があったので、在学中に 2 年間チュニジアで暮らし、卒業後は運よく JETRO アジア経済研究所に拾われた。中部アフリカ仏語圏諸国を専門として、1990 年代にコンゴ共和国（首都ブラザヴィル）とガボンで 2 年を過ごし、ここ 20 年ほどはルワンダに通って紛争と平和、農村変容といったテーマで勉強している。



アフリカ研究が面白いのは、わからないことばかりだからだ。例えば、ルワンダは 1990 年代に深刻な内戦とジェノサイドを経験した。『ホテル・ルワンダ』などの映画は、日本でも話題になった。どうしてこんなことが起こったのか、そうした状況を経験した人々はどう暮らしているのか、過去とどう向き合っているのか…。考え出すと、疑問は尽きない。現地に行くと、人々に話を聞く。話を聞いて、少しだけわかった気になるが、また新たな疑問がわく。こんなことの繰り返しで、飽きることはない。

現代アフリカ地域研究センターの設置は、アフリカ専攻の設置（2012 年）に続く措置で、近年の外大はアフリカを重視している。センターの仕事は多岐にわたるが、外大生にアフリカの魅力を知ってもらいたいと考えて、人的交流に力を入れている。交流活動の中核は、アフリカの大学から研究者を呼んで授業をしてもらうこと、そして交換留学を活性化させることである。アフリカの魅力を知るには、日本人がくどくど説明するよりアフリカ人と交流することが一番だ。アフリカに留学する外大生は増えているが、アフリカから日本にやってくる学生は少ない。留学時に仲良くなったアフリカの友人と、外大生が府中のキャンパスで再会する機会をつくりたいと考えている。

昔日の青春 佛友會々報 80年のタイムカプセルを開ける 20

坂井英俊（1965/ 昭 40）

昭和 10 年の記事の抜粋から。玉川一郎氏は「語劇の時でもボートの時でも、会費をとどこほらせて居ると云ふより拂った記憶のない記録に鑑み、非常に遠慮して出席をさしひかへて居りますが、この蓄音機会社に首がつながって居るうちでしたら、何かの催しの時に必要がありましたら、休憩時間のツナギ用の蓄音機なりレコードなりのサービスは致しますから、其の点だけならご遠慮なくお申し越してください。しかもその會かなんかにどこかのビール会社にでも居る先輩とでもタイ・アップが出来て居る場合なんかですと、さらに超サービスを致します。各先生方にもお目にかかりたい気もすることはありますが何分、在学当時の小生のリッチな態度を思ひあはせると非常にテレル率の方が多いので、これ又遠慮して居ります。入学したのが 20 歳の時、今が 32 歳です。滝村先生に白髪のおふえたのも無理もないわけです。大正十三年頃は滝村先生もニッカーを穿いてハンチング、自転車で学校においでになったものであるなんてことは、現在の在学諸兄の想像もつかん事です。>と、屈託がない。

続いて高田三九三氏。<會報に「近況随想」とやらを私に書けとのご命令ですが、私らの文章を掲げさせて戴いた處でいたづらに紙屑を製造するのみにて意味はないと思ひます。もっと

と一緒に奔走しました。ようやくフランス政府が中小企業用（勤務先はフランスの従業員数からは中小企業に該当）にマスクのオンライン発注サイトを開設し何とか発注できたものの、納品は遅れに遅れ、また納品の連絡があった際には直ちに指定の場所に受け取りに来なければ他に回されて受け取りが出来る保証がないとまで言われ、受け取り場所として指定された 16 区のスーパーに納品の連絡後直ちに参上するも、発注した会社の登記簿や受取人の身元確認に店員もてんでこ舞いで、マスクを実際に受け取るまでヒヤヒヤしました。現在はどこでも簡単にマスクを購入出来る状況となっていますが、公衆衛生上の効果を上げる観点からマスク着用を義務化し徹底させるのであれば、マスクを無償支給すべきという議論もなされています。

ロックダウン中は幸い勤務先のロンドン本店の IT 部門の尽力の結果、テレワークの全面的な実施が可能となり、従業員全員がテレワークをすることとなりました。従業員各自の置かれた環境や業務内容によってテレワークへの評価はまちまちですが、それまでフランスではそこまで普及していなかったオフィス業務のテレワークがやむを得ず一挙に普及することになりました。5 月 11 日からの段階的ロックダウン解除の時期は、外出時に証明書を携行しなくてもよくなり精神的にも楽になりましたが、仕事の面では、段階的なオフィスでの業務再開に向けての作業が必要になりました。労働省が作成した企業用の衛生管理上のマニュアルに従って、オフィス内の従業員の行き来を統制するための進行方向のマークを床に貼り、社会的距離の維持や手洗いの励行等の衛生安全対策に関する注意喚起やスペースごとの利用最大人数の掲示を壁に貼り、抗菌ジェルタワーを入口に設

大学時代の私は友人とつるんでばかりの怠惰な学生だったが、外大でフランス語を学んだことには感謝している。英語とフランス語が使えれば、アフリカのほとんどの都市で不自由しないし、英米以外の情報源を持つことで複眼的な思考が可能になる。フランスはアフリカとの間に切っても切れない緊密な関係を構築しており、ル・モンドやラジオ・フランス・アンテルナショナルほど、アフリカを広く、深くカバーしているメディアはほとんどない。

出来の悪い学生を温かく見守ってくださった当時の先生方にも、深く感謝している。大学 3 年になり、さすがに少しは勉強しようと日仏学院に通った時、飯田橋駅の近くで西永良成先生とすれ違った。いきなり「君はなぜフランス語を勉強しているの?」と尋ねられ、「アフリカに行きたいんです」と答えた私に、「それはとてもいいことじゃないかなあ」と先生はおっしゃった。自分の先行きに不安しかなかった私にとって、その言葉はとてもありがたく、その後も折に触れて思い出すのである。

ダヴィド? デイヴィッド? デービッド? — 翻訳者のひとりごと

佐藤絵里（1984/ 昭 59）

英日、仏日の出版翻訳の仕事始めて、かれこれ 20 年になります。

海外の児童文学が好きで翻訳という仕事に憧れていた子供の頃、翻訳者とは辞書など使わず、スラスラと外国語を日本語にできる人だと思っておりました。ところが、現実には、いつまでも辞書が手放せないばかりか、インターネットや図書館の資料のお世話になりっぱなしです。



固有名詞の読み方、人物の経歴、事件の背景を調べ、引用の原典を当たり、年号が正しいか確認し（原書に誤植のおそれもあるため）、衣服、家具、建物などの画像を見るときといった調べ物に、かなりの時間を費やしています。

エライ先輩にご依頼される様希望いたします。それに貧乏暇無しで学校の方へもご無沙汰してる様な次第ですから、今回はご容赦願ひます。小生・学生時代から童謡を作っておりますが、もし穴埋めにでも御使用になるなら、フランスものの訳したヤツを二三お送りしてもいいと思ひますが、これもあまり變な訳で免状を取り上げられると大變ですから、他でお間に合ひならば間に合はせてください。近い内に一度学校の方へも伺ひます。諸先生によりしく。>無論その背後には戦に夢中の祖国があった。

鈴木重利氏は、入学試験口頭試問の思い出「受験の青春」を語る。<口頭試問迄行けば、大抵は大丈夫だ、とは思ってゐてもやはり「23 番」とよばれてみると、なんだか自分でもわからない様な不安な気持ちになって居た。その気持ちのせいかな、それとも戸が悪いのか、試問室の戸が中々開かないのである。それでも三度目に力を少々入れ過ぎたか、いきなりガラガラと戸が開いてしまったとき、そして先生方の視線の一斉射撃を受けたときには不思議に気も落ち着いて居た。名前や番号を云ふのに、自然と震え声になって居たのは少々意外だったが、これで初めて気は落ち着いて居ても声は震えると云ふことを体験した。右手におられた先生(今思へば確かに増田先生と鷲尾先生)が「原籍、お父さんの職業は」の次にいきなり「君の崇拜する人物は」と来た。前以て考えて居なかつたので「浜口雄幸」と応えると「ほほう・・・」と如何にも驚かれたような口調。「どういふところがかね」と突っ込んで来た。啾啾にあの偉大なる

置、社内規定に準ずる従業員向けのオフィスでの衛生安全対策に関する指示書を作成・通知といった具合に、感染を防止し従業員の衛生安全確保を第一とする観点から、非常に神経を使うこととなりました。

6 月 2 日からは、フランス人の心の拠り所ともいえるレストランの屋内でのサービスも再開し、ようやくほぼ通常に戻りつつある感がありましたが、仕事面では、従業員の衛生安全の確保が最優先で通勤時の感染リスクを軽減する意味もあり、現在もテレワークが中心となっています。そのような中でバカンスシーズンに入り特に若者の気分も緩んでいるからか、検査実施が増えているからか、重症者数は少なく収まっているにもかかわらず新規感染者数が再び増えてきていて、フランス政府も神経を尖らせています。屋内の密閉空間でのマスク着用は既に義務化（着用していない場合は 135€ の罰金もあり！）されていたものの、パリでは屋外でのマスク着用義務のある地区が拡大され、着用義務の有無を確認する手間を省きたいのであれば、外出の際は常にマスク着用ということになります。

一方企業内での感染も増えていることから、9 月初めからは、オープンスペースや会議室等の会社内での共有スペースでのマスク着用も義務付けられる見込みです。今年の 2 月に日本からの出張者がマスクをして来訪した際には、フランス人同僚は来訪者が病気かと思っ警戒していたように見えてましたが、そのフランス人同僚も今は皆マスクを着用しており、隔世の感があります。手洗いの励行や、家では靴を脱ぐなど、日本人的な生活スタイルがフランスでも浸透し、コロナ対策のお陰でフランス人の衛生面での意識は向上したように思われます。(8 月 22 日)

悩ましいのが固有名詞の表記です。David の場合、フランス人なら「ダヴィ(ッ)ド」、英米人なら「デイヴィッド」あるいは「デービッド」。発音を確認したうえで、表記に揺れがないよう統一しなくてはなりません。英文中の Martin を「マーティン」と訳していたら、途中でフランス人だとわかり、あわてて「マルタン」に改めたこともありました。著名人でない中国人の名は、アルファベットから元の漢字表記を探そうとしても、ほとんどお手上げです。人名だけでなく地名も要注意。先日、英文中のポーランドの地名 Lodz を調べたら、読み方はなんと「ウッチ」でした。発音にかかわらずアルファベットで表記すれば済む言語が羨ましく、時に恨めしいです。

フランス語には長母音がないので、カタカナで表記する際、音を伸ばすかどうか迷います。女性の名 Marie は「マリー」とされることが多いですが、原音はどちらかといえば「マリ」でしょうか。この原稿を書くにあたり LA NOUVELLE 24 号を拝読して、「ボジョレ・ヌヴォ」の表記に、さすが、と膝を打ちました。

重箱の隅をつつくような仕事ですが、新しい知識や視点を得られる喜びもあります（その知識をすべて覚えていたら、なおいのびますが…）。今年 5 月に刊行された『バステューの悪魔』（E・ガポリオ著）では 17 世紀の社会や風俗について学び、IRIS（国際関係戦略研究所）所長パスカル・ボニファス氏著『最新 世界情勢地図』『最新 世界情勢講義 50』では、国際社会のリーダーを自認するフランスの自負を強く感じました。『agnès b. STYLISTE』などファッション関連の作品では、文化の分野でフランス語の持つアドバンテージを再認識し、『紺碧海岸のメグレ』では、ジョルジュ・シムノンの簡潔な文体にしばれました。

英語圏と仏語圏の在任経験もなく、フランス語と英語のどちらも半端なことにずっと引け目を感じていましたが、今は少し開き直り、力不足ながら両方に関わって視野を広げられたことに感謝しています。最近ではコロナ禍で在宅勤務が目立っています。翻訳者の生活は、元々ステイホーム。ワークライフバランスを保ち、足腰の衰えを防ぐことを心がけつつ、この仕事を続けていけたらと思っております。

鼻と髭を思ひだし「なんとなく男らしいです」とやった。「何處が男らしいか」と聞かれてはちと困ると思って居たが、幸ひにも質問は其のまま他の方へ移っていったので、ほっとした。外へ出ると向かひの控室で「26 番」と次の戸の受験者と呼ぶ聲がして居た。廊下を真直ぐ歩いていると、思はずにやりと笑ひが浮かんで来た。何故だか自分にはわからない。今以って不可解な笑いである。>

また昭和 10 年 6 月刊では高橋邦太郎氏が「在校生の方々に望みたいこと」と題し、<世の中は、フランス語がいくら良く出来ても駄目です。兼常博士は、ピアニストの弾く音も猫のたたいたピアノの音も、同じことだといわれました。語学についても、同じやうなことがいへると思ひます。語学を等閑に附せとは云ひませんが、つぶしのきかない人間になる事はお互いに困るでせう。仮にも、文学に志す僕の口から、算盤だの習字だのといふ極くつまらないものでもいいから勉強したまへ、といふのは、實は、最近、どこの学校でも、卒業生が実務に少しも適さない、といふ歎声を聞くからです。家に金がウンとあるとか、天才とかなら、学校を出て就職口がなくても平気でせうが卒業生の 99% は、すぐ就職した方がいい人達だと思ひます。この為には雇ふ方で雇ひいい条件を身に付けてゐるのが肝要です。それには極く平凡な仕事に堪能であることが非常に必要なのです。>

<次回へつづく>